

鉄道と自然資源を活かした水上温泉の再活性化

704-018 王 崢 指導教官 戸所 隆

Re-activation of the hot spring of MINAKAMI which made use of a railroad and natural resources

WANG Zheng

1. はじめに

バブル経済の崩壊以降の長引く日本の経済低迷を打開するために、幅広い経済波及効果を有する観光振興による地域経済の振興への関心が高まってきている。そのため、日本の文化・伝統や豊かな観光資源を全世界に紹介し、海外からの旅行者の増大と、それによる地域の活性化を図ることが国の施策方針にも盛り込まれた。

日本は地球時代、人口減少・高齢化時代、高度情報化時代の到来などで大きな時代の転換期を迎える中、1998年に第五次の全国総合開発計画「21世紀の国土のグランドデザイン——地域の自立の促進と美しい国土の創造——」を策定した。この計画では、一極一軸型の国土構造から多軸型国土構造への転換を長期目標として掲げ、「参加と連携」の下に、地域による選択と責任に基づく地域づくりが重視されるようになった。また、これまでの全総計画とは異なり、観光振興に大きく焦点が当てられ、観光の高質化による地域活性化、交流人口の拡大、美しい国土づくりの必要性が提示されている。

近年の産業構造の変化等により日本の地域活力は低下した。また、地域の画一化・没個性化が進み、まちの魅力が失われてきている。こうした中で、五全総でいう「地域の自立」を実現するために、地域固有の観光資源を活用した魅力ある観光地域づくりを支援していく施策が進められつつある。その重要施策として、観光まちづくりの推進、ITの積極的活用、観光産業の高度化・多様化、ホスピタリティの向上など、国民意識の喚起が挙げられる。

日本は世界でも有数の温泉国であり、温泉地は保健休養地・観光地としてきわめて重要な役割を果たしている。さらに、今後の社会変化と国民の多様なレクリエーション志向、健康への関心の高

まりなどにより、温泉地の果たす役割は一層重要なものとなると考えられる。

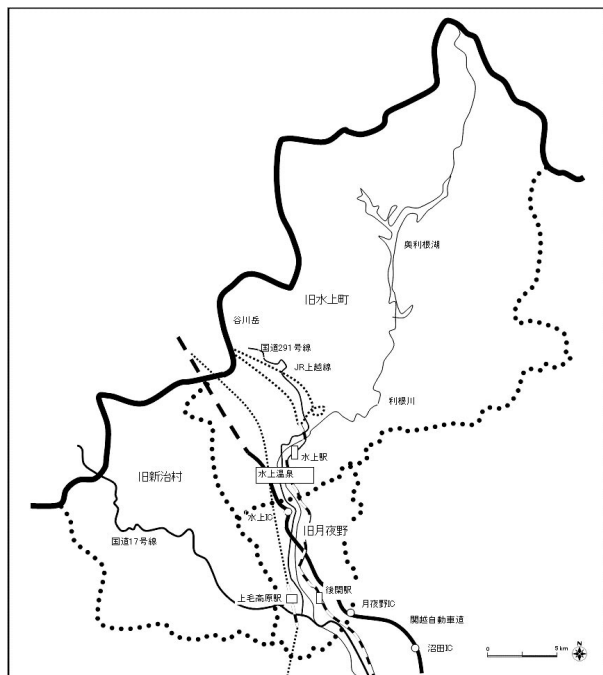
ところで、高度経済成長期に急成長した歴史のある温泉地は、工業化社会から知識・情報化社会に転換する中で変化を迫られている。本研究では、群馬県みなかみ町の水上温泉を例に、従来型温泉観光地の問題点を明らかにし、交流時代における温泉観光地の空間構造のあり方および再活性化方策について検討する。温泉観光地での観光客の中心が団体客から個人客に変化する中で、交流空間としての温泉中心街の充実が求められ、最構築を行なう必要が出てきた。また、再構築の方向性として、水上温泉では鉄道を軸に自然観光資源を結びつけたネットワークの創出が考えられる。本論文では、温泉中心街を新たな交流空間とする水上温泉の再活性化の方向性を提示することを目的とする。

研究方法は、みなかみ町のまちづくり計画の経緯を明らかにし、水上温泉湯原地区の構造変化を捉え、水上温泉活性化の課題を整理する。次に、水上温泉に訪れる観光客を対象としたアンケート調査とヒアリング調査を実施し、観光客の立場から水上温泉の問題点や活性化のあり方などを考察した。最後に、その考察の結果に基づいて、鉄道や自然資源などの地域資源を活かした空間整備方策を検討する。鉄道を軸に自然資源と結びつけた拠点温泉観光地の創出と新たな温泉観光地の構造パターンを提案したい。

II. 研究対象地域の概観

群馬県みなかみ町は群馬県の最北端に位置し、新潟県と境を接し、谷川岳、平ヶ岳のそれぞれで県境を画する。2005年10月1日の合併により、旧月夜野町、旧水上町、旧新治村の2町1村でみなかみ町は構成される。みなかみ町は利根川の源流地域で、東京をはじめとする首都圏の経済・生活を維持する水源地域となっている。交通はJR上越線、上越新幹線、関越自動車道、国道17号線、国道291号線などが整い、良好な環境にある(第1図)。

水上温泉の中心は、利根郡みなかみ町湯原地区である。JR上越線水上駅の南に約1km、利根川本流の水上峡付近で、標高約500mである。



第1図 研究対象地域概観

1931年上越線が水上まで開通する以前の水上温泉は、七橋七湯といわれ、湯原・小日向・谷川・大穴・湯檜曾・湯ノ小屋などで旅人宿が営まれていた。1929年に奥利根温泉組合が発足し、観光客の受け入れ態勢の強化、観光施設の充実に努めた。1931年の上越線全通で観光客が漸次増加し、温泉街も発展した。その結果、利根川の両岸に分かれていた湯原・小日向の2温泉が統合して水上温泉と改称した。湯原地区は、奥利根・谷川方面の観光拠点として温泉街の整備・高層化が進み、首都圏の奥座敷として週末を中心に賑わう。

III. 研究の結果

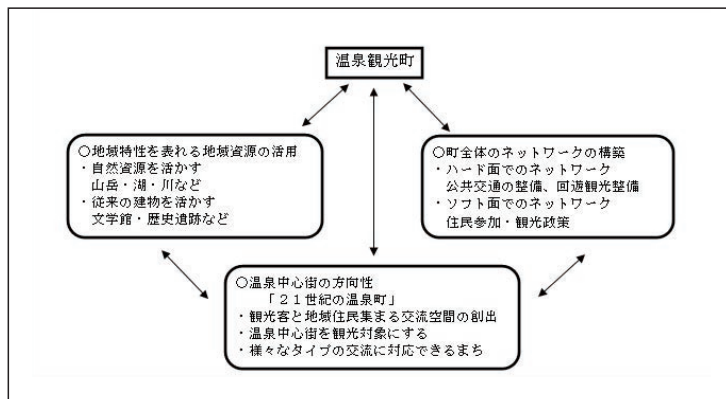
1. 交流空間としての温泉中心街の再構築

高度経済成長期の到来による旅館の大型化及び自動車交通時代、高速交通時代になると水上温泉への来訪者や観光客の行動は、「自動車（インターチェンジ）・駅（水上駅、上毛高原駅など）——温泉（旅館、ホテルなど）」という流れに大きく変貌した。旅館やホテルなどへ自家用車や送迎バスなどで直接乗り入れることにより、温泉街を通過する観光客が増大した。さらに、旅館やホテルなどの囲い込み経営戦略と宿泊施設内の街化により、街歩きを楽しむ温泉街から観光客は分離された。この交通体系と経営方針の変化により、温泉街の観光客に対する商業機能が縮小し、温泉街の衰退が進んだと考えられる。

温泉街のにぎわいを取り戻すためには、観光客と地域生活者の交流空間の再構築が必要になると考えられる。何故ならば、「観光」とは、中国の易経によれば「国の光を観る」ということである。これは地域の光、すなわち比較優位な個性や魅力などその地域の多様な可能性を観たり触れることで感動し、それらをヒントに自らのエネルギーを高めることである。そしてさらに重要なことは、地域を訪れる人々だけではなく、観光客を迎え入れる地域の人々も大きなヒントや構造転換の大切な機会を与えられることである。これを踏まえて温泉街を新しい交流空間として位置付けて、再構築を行なうべきである（第2図）。

水上温泉の立地は、自然環境に恵まれたところが多い。利根川が温泉街の中心部に流れ込み、水軸として温泉街の全体の骨格を造る。さらに、川沿いの自然景色と温泉街の融合は、水上の独特の雰囲気を生み出している。

旅行には本来、他地域の人が訪れ、未経験の新しいもの



第2図 みなかみ町の温泉観光地化への方向性

に接し、楽しみ、地元住民と交流する機会等に対する期待が、大きな要素として存在する。そのため、「21世紀の温泉町」を目指す水上温泉には、「来訪者が注目し、訪れ、満足し、再訪を考え、その上その経験を広く宣伝してくれる」仕組みづくりが不可欠である。

2. 鉄道を軸に自然観光資源を結びつけたネットワークの構築

(1) 観光拠点の創出

交通機関のターミナルや観光地という人や商店の集積する場所は、その土地のにぎわいの場である。水上温泉では JR 水上駅から 1 Km ほど離れた地域に、宿泊施設や商店や人などの集積する観光拠点がある。この地域は従来の「点型」観光地として整備されてきた。しかし、交通路の整備や交通機関の発達によって、観光客の行動や志向が大きく変化する中で、この「点型」観光地の形態では観光客に対して魅力を持たなくなった。新しい時代の観光地形成は、拠点となる観光対象・地域住民・観光客の交流を基本に、観光地を「点型」から「拠点型」へと転換する必要がある。

拠点観光地の形成は、かつての「点」から「点」を結んで周遊する「回遊型観光」の時代からの脱皮を意味し、整備された「点」を拠点とし、その周辺地域資源を活用し、地域滞在性を重要視する回遊型の「面」の総称である。この地域は合併により、広域的な観光交通のネットワークの構築が必要と考えられる。ネットワークの構築により複数の観光対象をつなぐことで、個々の観光地だけでは出しにくい新たな魅力をつくることもできる。観光客の選択肢を増やすこととなり、来訪の機会を高めることとなる。

(2) パーク・アンド・ライド・システムの構築

近年、ウォーキング・ブームや歩いて楽しむ温泉地づくりが盛んである。そこで、温泉街への自動車進入台数を制限し、街並みを整え、歩いて楽しめる温泉街にする必要がある。そのためには温泉街の外縁部に大規模な駐車場を確保し、駐車場と温泉街や観光資源などを結ぶ乗合バスを常時運行するパーク・アンド・ライド・システムの構築が有効と考える。

水上温泉では、来訪者の交通手段に対応するため、二つの対策が考えられる。まず、一つ目は新幹線上毛高原駅前の駐車場を活用することである。二つ目は水上温泉の入口である道の駅、水紀行館にある旧水上町営駐車場を活用することである。自動車観光客に対応するパーク・アンド・ライド、公共交通を利用する観光客に対応するライド・アンド・ライドの施策の本格的な導入を積極的に推進する必要がある。また、水上温泉に関係する経営者をはじめとする官民の諸機関がネットワーク化を図り、協調して観光客に楽しい温泉街づくりを感じさせることが不可欠である。

3. 地域連携関係の構築

情報化社会の進展によりデジタル化された観光情報が、各種のネットワーク等を利用する形で提供されるようになった。そのため、従来の観光パンフレット等と比べると、観光情報が様々な形で多くの観光客に効果的に提供可能となってきた。こうした状況をさらに活かすには、地域間の情報

共有や情報提供などの連携関係の構築が必要である。その観光情報の収集提供のあり方について、この地域の連携関係をどのように構築するかを検討する。

みなかみ町の場合では、上毛高原駅前の観光センターの活用を提案したい。この観光センターは第三セクター方式で運営し、観光レジャー行動の拡大発展に伴い、観光客が求める観光関連情報をネットワーク・システムによって収集・整理・加工し、提供する必要がある。また、観光関連企業をはじめ、広域地域の公共機関、団体、住民など多数の情報保有者の参加と連携により、観光客に魅力ある情報を提供できるようにしなければならないと考える。

IV. 結論

観光は 21 世紀のリーディング産業である。世界の国際観光客数の伸びは著しく、交流経済の市場規模は急拡大する見通しである。特に経済発展を遂げつつあるアジアの一大マーケット化は、日本の観光振興にとって大きなチャンスである。これを機会に地域の魅力づくりを行い、交流立国化の推進と観光産業の活性化により地域全体を活性化することが望まれる。

温泉地は地元の人々の利用と観光客の利用で生活空間と観光空間の合体つまり新たな交流空間の「街」として成立していた。ところが、歓楽地化の中での温泉地は旅館街となり、やがて「街」もなく、「旅館」だけが観光客を迎え、地域と遊離した。これからの「温泉地づくり」はまず「まちづくり」でなければならない。

21 世紀型の新しい水上温泉のコンセプトを考えるには、もう一度温泉地の持っていた魅力を原点にする必要がある。保養・療養の場であり社交や楽しみ場の両立している場所、その二つの機能が調和し共存している場所に立ち戻ることである。また、この地域の資源を再考察し、温泉地の近代化の中で置き去りにしてきた保養・療養の場としての意味を新しい価値観で蘇らせることである。そのコンセプトは「心地よい環境の中で、歩いて楽しくて、そして心と体の健康によい時間が過ごせる場所」である。

